やまなし介護感動ストーリー大賞
受賞者作品集

令和8年2月

山梨県

やまなし

「やまなし介護感動ストーリー大賞」は、介護に関する感動エピソードを募集し、選出されたエピソードの応募者及びエピソードに登場する介護サービスを提供した個人・事業所を表彰するとともに、受賞エピソードを漫画化、冊子を作成し、関係各所へ配布することで、介護の魅力発信や若年層などに介護のすそ野を拡大することを目的としています。

このたび、介護サービス利用者やその御家族、介護職員の方から多数のエピソードを応募いただき、改めて感謝申し上げます。

審査を行った結果、次のとおり、グランプリ１点、準グランプリ２点を選出させていただきました。

選出された作品については、本年度中に漫画化し、介護の魅力発信等に活用して参ります。

（受賞者一覧）

表彰種類	作者/介護職員/事業所	氏名/事業所名
グランプリ	作者・介護職員	工藤　亜沙実　様
	作品に登場する事業所	デイサービスリハかのん白根　様
準グランプリ	作者	切刀　千秋 様
	作品に登場する事業所	有限会社小春日和　様
準グランプリ	作者	星野　淳 様
	作品に登場する介護職員	大月富士見苑 佐々木　彩　様
	作品に登場する事業所	大月富士見苑　様

グランプリ

「想いがつなぐ一枚のカード」　工藤亜沙実 様

Ｉ・Ｕ様は、１０年程前からデイサービスを利用されているご利用者様です。自己紹介の際にはいつも照れくさそうにこうお話されています。「ここに来てリハビリするのが一番の楽しみです。」そんなＩ・Ｕ様が夏のある日、体調を崩されて入院する事になってしまいました。デイサービスではちょうど、敬老会に向けて、日頃の感謝の気持ちを込めた「写真入りメッセージカード」を作成しているところでした。私は自己紹介の時に照れながら笑っているＩ・Ｕ様の写真を見つけ、「Ｉ・Ｕ様にも渡したかったな…」と写真を眺めながら呟きました。すると、周りにいたスタッフの一人が「Ｉ・Ｕ様にも渡したかったですよね。」と同じように言いました。それをきっかけに、他のスタッフも「そうですよね。」「管理者に聞いてみましょう。」と声をあげました。その時私は心の中で「あぁ、皆思っている事は同じなんだな」と感じ嬉しくなりました。ちょうどそこに管理者が戻ってきたので「敬老会のメッセージカードをＩ・Ｕ様にも作ってお渡ししたいのですが良いですか？」と相談しました。管理者は笑顔で「うんうん。ご家族には私が届けるから、ぜひ作ってあげて。」と答えてくれました。数日後の朝礼で管理者から「Ｉ・Ｕ様のご家族がとても喜んでくださって“スタッフの皆様によろしくお伝えください”と伝言を預かりました。」と報告してくれました。その瞬間、スタッフ全員の顔に自然と笑顔が広がりました。運動会に向けた準備をしている頃玄関のチャイムが鳴りました。娘様でした。「母、頂いたメッセージ

カードを枕元に置いてどこ行くにも持って歩いているんですって。ここに戻ることを目標にリハビリを頑張っています」私はその言葉を聞いてＩ・Ｕ様への想いが届いていた事を感じ「これからも一生懸命介護の仕事を続けていくこと」を誓いました。そして半年後Ｉ・Ｕ様は無事リハビリを終え私たちのデイサービスに帰ってきてくださいました。

準グランプリ

「いつか行く道」　切刀千秋 様

訪問時間の十分前、甲府の朝は冷え込みが厳しく、白く浮かんだ息を吐きながら玄関前に立った。静まり返った家の扉を開けると、鬼の形相で階段に座る姿が飛び込んできた。「どうされたんですか。」声をかけ、手を握ると、その手は芯まで冷え切っていた。「どうもこうもないよ。」不機嫌そうに返されたが、手は弱々しくも握り返された。

都内の病院を長年勤め上げ、定年後すぐ最愛の奥様を亡くし、故郷の甲府で一人暮らしを続けている。「君が来なければ、この家の空気は動かないんだ。」その言葉は胸の奥深くに突き刺さった。誰かの存在が、空気を動かし、命を温める。そんな当たり前のようでいて、切実な現実がそこにあった。

背中を丸め、両手で包み込むようにして汁椀をすする姿。その姿には、与えられた命を丁寧に全うしようとする、静かで力強い意思が宿っていた。歳を重ねると言うことは、私たちもいつか行く道。その道が孤独と寒さに覆われたものにならないように、そう願いを込めて、仲間とともに、この事業を立ち上げた。

ご利用者様も、介護に携わる者も、共に「佳き歳月を重ねていく」そして、いつか行く道が、寂しさではなく、ぬくもりに包まれますようにと。その願いを胸に、今日の誰かの空気を動かしに向かう。

準グランプリ

「もう一度あの笑顔に会いたくて」　星野淳 様

九十九歳の女性利用者Ａさんは、それまで週３回、元気に大月富士見苑のデイサービスに通い、いつも笑顔で仲間と過ごしていました。目標は「もっと元気になって、また日本舞踊に挑戦したい」。その明るい笑顔は、職員や利用者みんなの励みでした。

けれども大腿骨を骨折し、入院生活を余儀なくされました。退院後は食欲も落ち、表情も乏しくなり、主治医からは「もうデイサービスに通うのは難しいでしょう」と告げられました。それでも、あの笑顔をもう一度見たいという思いから、職員がご自宅を訪ねて声をかけました。すると本人が「またデイに行きたい」と話してくださり、体調を見ながら通所を再開することになりました。

主治医の見立ては「いつ何があってもおかしくない。」それでもご家族や遠方の子どもたちと何度も話し合い、「こんなにいい笑顔を見せてくれるなら、何があっても本人のしあわせのために」と、みんなが温かく背中を押してくださいました。

通ううちに少しずつ食欲が戻り、体重も増え、会話や笑顔も増えていきました。仲間と過ごす時間が、生きる力になったのだと思います。デイで過ごすそのひとときが、Ａさんにとって心から安らげる時間になっていると感じます。

Ａさんの姿を通して、年齢を重ねても「自分らしく生きる」ことを支える大切さを改めて学びました。これからもＡさんが安心して笑顔で過ごせるよう、職員

一人ひとりが心を合わせて寄り添い続けたいと思います。経営理念「しあわせを共に」に沿った仕事ができることに、日々のやりがいと誇りを感じています。そして何より、Ａさんの笑顔が私たちに元気を与えてくれています。

Ａさん百歳まであと少し！

一緒に頑張りましょう！